

PostgreSQL論理デコード入門 — PostgreSQLから変更データを取り出す しくみ

株式会社SRA OSS
馬 雪ティ

株式会社SRA OSS

所 在 地: 東京都豊島区南池袋2-32-8

設 立 日: 2022年6月17日

株 主: 株式会社SRA
株式会社NTTデータ

資 本 金: 7,000万円

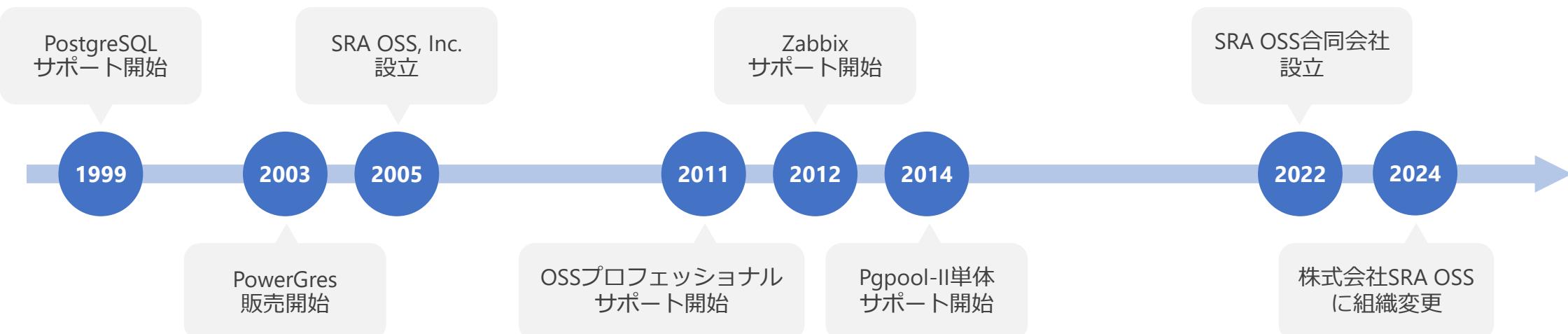
社 長: 稲葉 香理

事業内容

- ・ オープンソースソフトウェア (OSS) 関連のサポート、製品開発・販売、構築・コンサル
- ・ OSSの教育、開発、コミュニティ運営支援
- ・ ソフトウェアの研究開発

顧 問: 石井 達夫

技術顧問: 増永 良文 (お茶の水女子大学名誉教授)



名前: 馬 雪ティ

所属: システムインフラ開発室

担当業務:

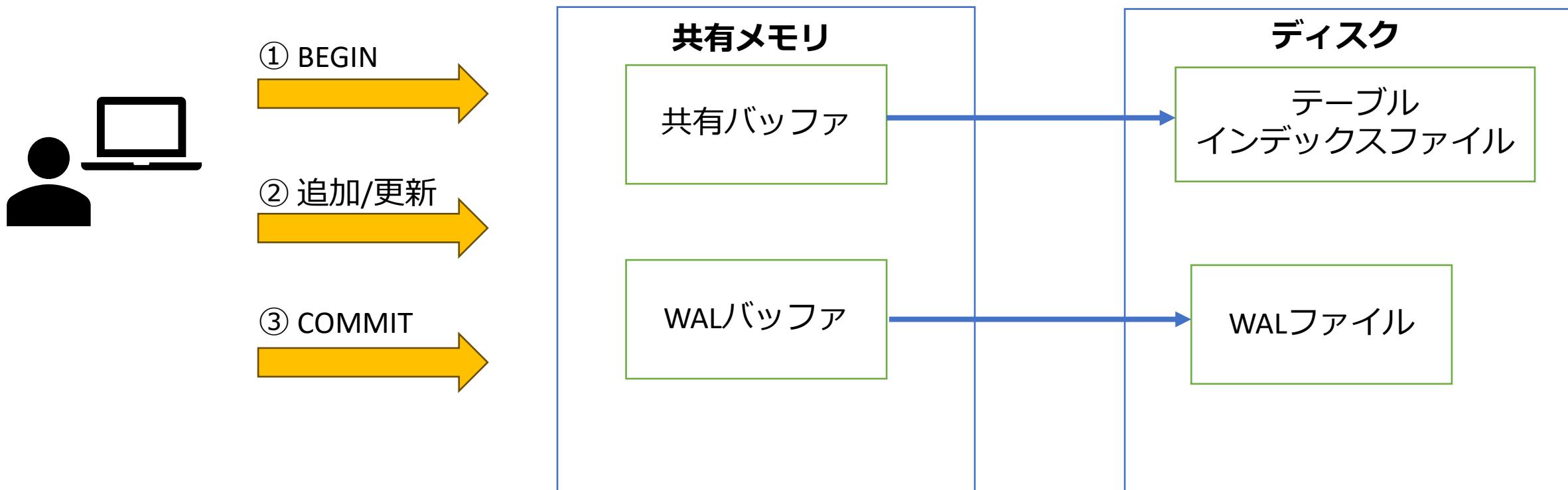
- PostgreSQLサポート
- PostgreSQL HAクラスタ構築・コンサルティング
- 社内システム開発

- 背景
- 論理デコードとは
- 論理デコードの仕組み
- 出力プラグイン
- 簡単な実践
- 応用の方向性

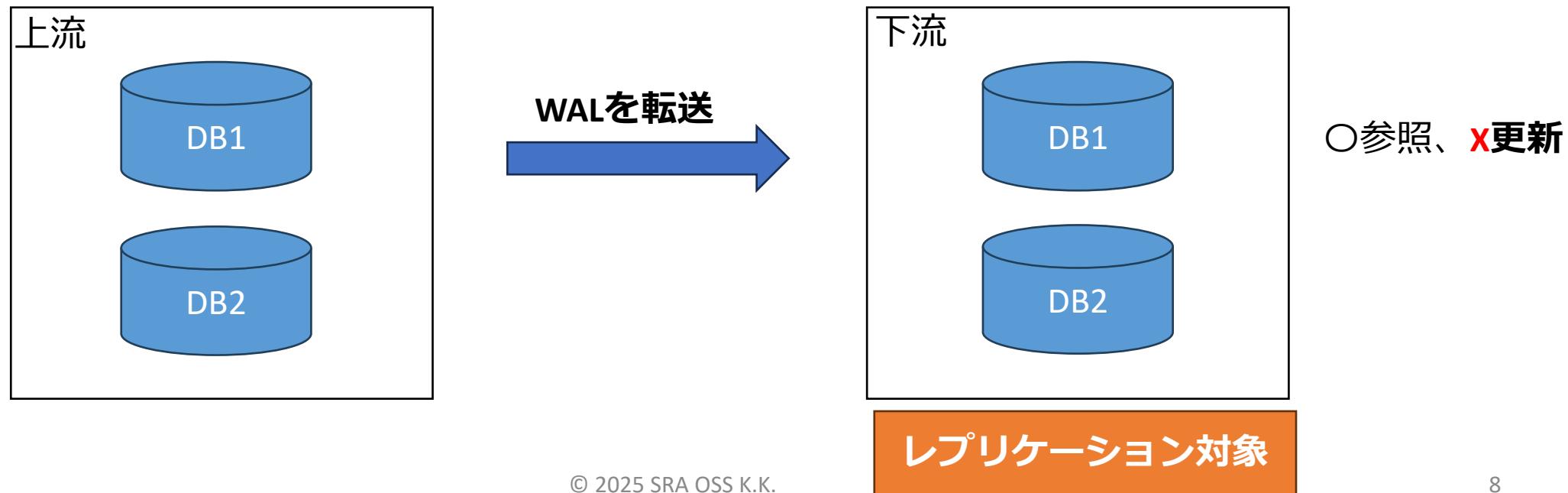
- 「論理デコードがどのように動くか」
- 「どの設定をすれば有効になるか」
- 「簡単な実践テストを行えるようになる」

背景

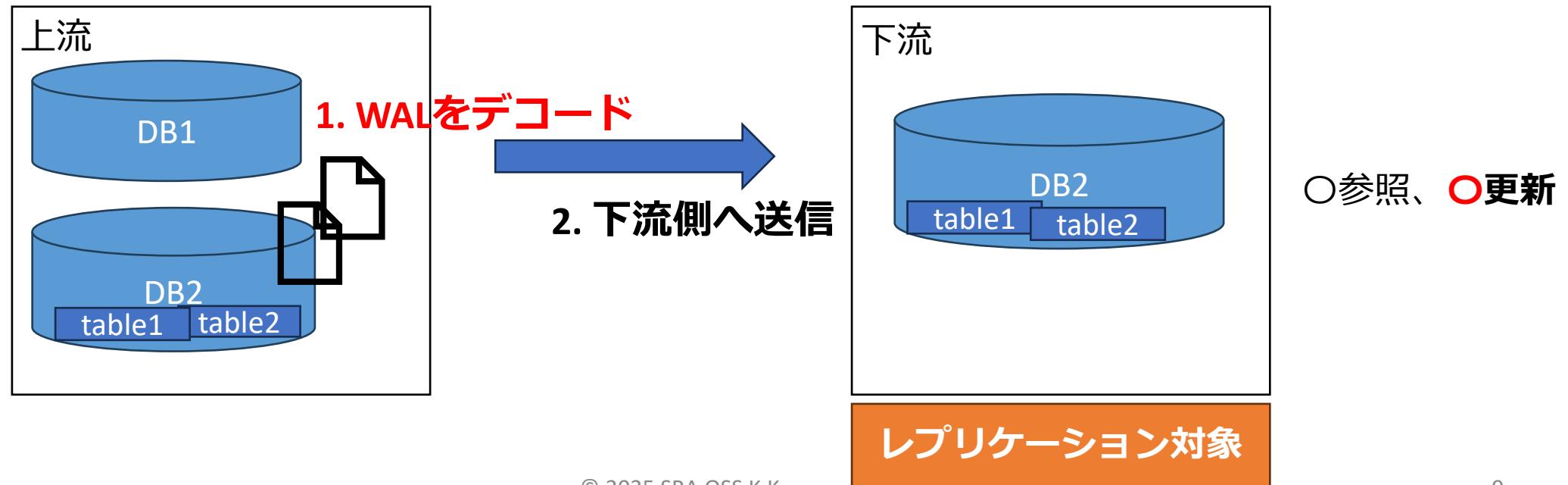
PostgreSQLのトランザクションの開始・終了とデータの変更情報のログを先にディスクへ記録すること。



- 物理レプリケーション
 - 全DBを対象に、WALを丸ごと転送して複製する方式
 - 下流側では参照のみ（更新不可）
 - PostgreSQLのメジャー・バージョンは同じである必要
- 📌 用途：高可用性（HA）、災害対策（DR）



- 論理レプリケーション
 - テーブル単位でレプリケーション対象を指定できる
 - WAL をデコードし、細かい単位で変更イベントとして下流へ送信
 - 下流側でも更新が可能（双方向構成も可能）
 - 異なるメジャー・バージョン間でのレプリケーションも可能



PostgreSQL の中では、
すべての変更（**INSERT/UPDATE/DELETE**）は WAL に書かれてから反映される。

しかし…

- WAL は**バイナリ形式**で、人間にもアプリにも読めない
- 物理レプリケーションでは**丸ごとコピー**するだけ
- 「アプリ側は、どの行が更新されたか知りたいケースが多い」
例) 監査ログ、差分同期、リアルタイム分析

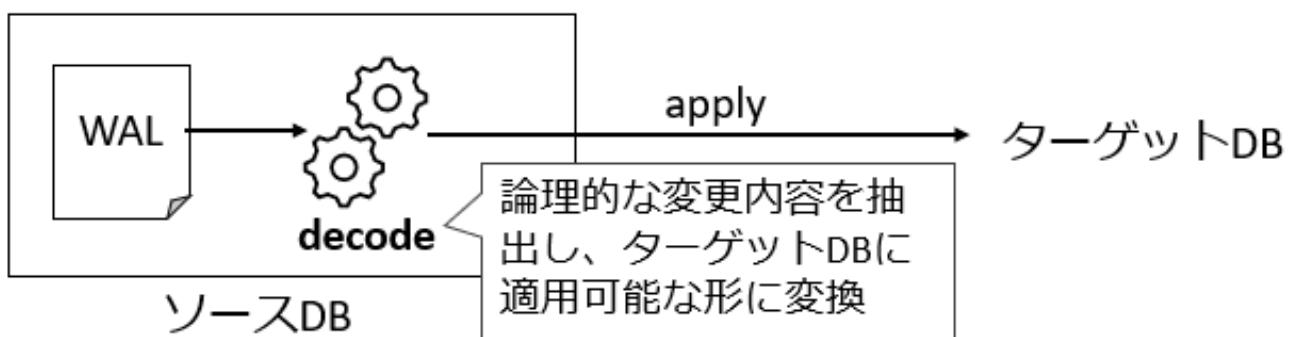
=> その「別の仕組み」が **論理デコード (Logical Decoding)**。

WAL から “意味のある変更情報” を取り出す翻訳装置と思えばよい。

論理デコードを使うと：

- ・変更内容を細かい単位で取得できる
- ・JSON など好きな形式に変換できる
- ・PostgreSQL → 外部システムに通知できる
- ・監査ログ・差分抽出・ETL の構築が可能

=> PostgreSQL を “他システムとつながるデータベース” に変えるコア技術



論理デコードとは

論理デコードとは

- WALに記録された DB 変更内容を PostgreSQL 外でも読める形式に変換して出力する。出力形式は使用するoutput pluginによって選択。

```
postgres=# BEGIN;  
postgres=# INSERT INTO data(data) VALUES('1');  
postgres=# INSERT INTO data(data) VALUES('2');  
postgres=# COMMIT;
```

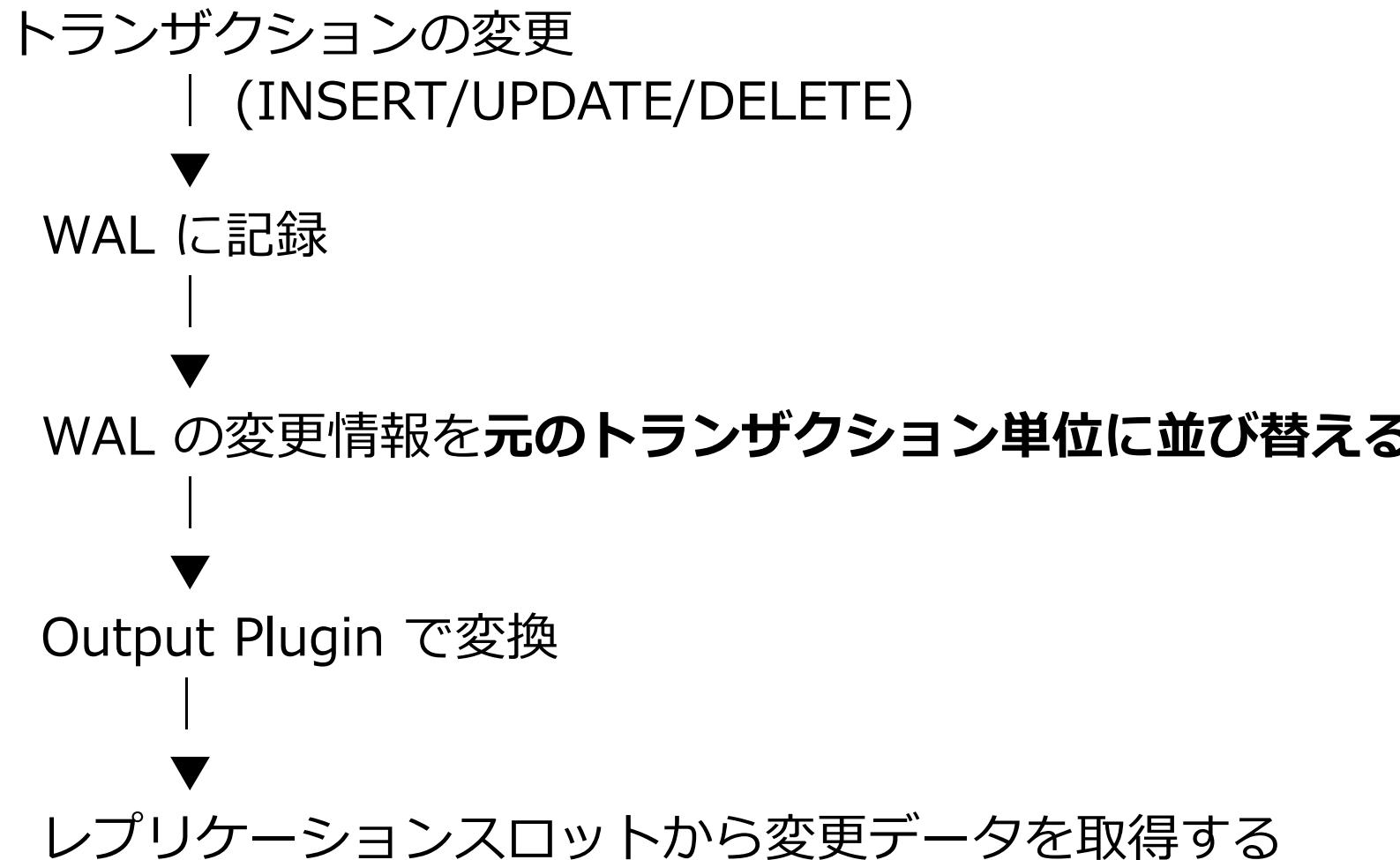
↓ (test_decodingプラグイン)

実行例では、
pg_logical_slot_get_changes() で
WAL を読みやすい形式に変換

```
postgres=# SELECT * FROM pg_logical_slot_get_changes('regression_slot', NULL, NULL);  
lsn | xid | data  
-----+-----+  
0/BA5A688 | 10298 | BEGIN 10298  
0/BA5A6F0 | 10298 | table public.data: INSERT: id[integer]:1 data[text]:'1'  
0/BA5A7F8 | 10298 | table public.data: INSERT: id[integer]:2 data[text]:'2'  
0/BA5A8A8 | 10298 | COMMIT 10298  
(4 rows)
```

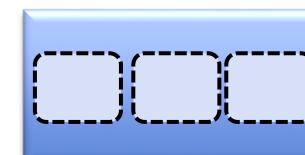
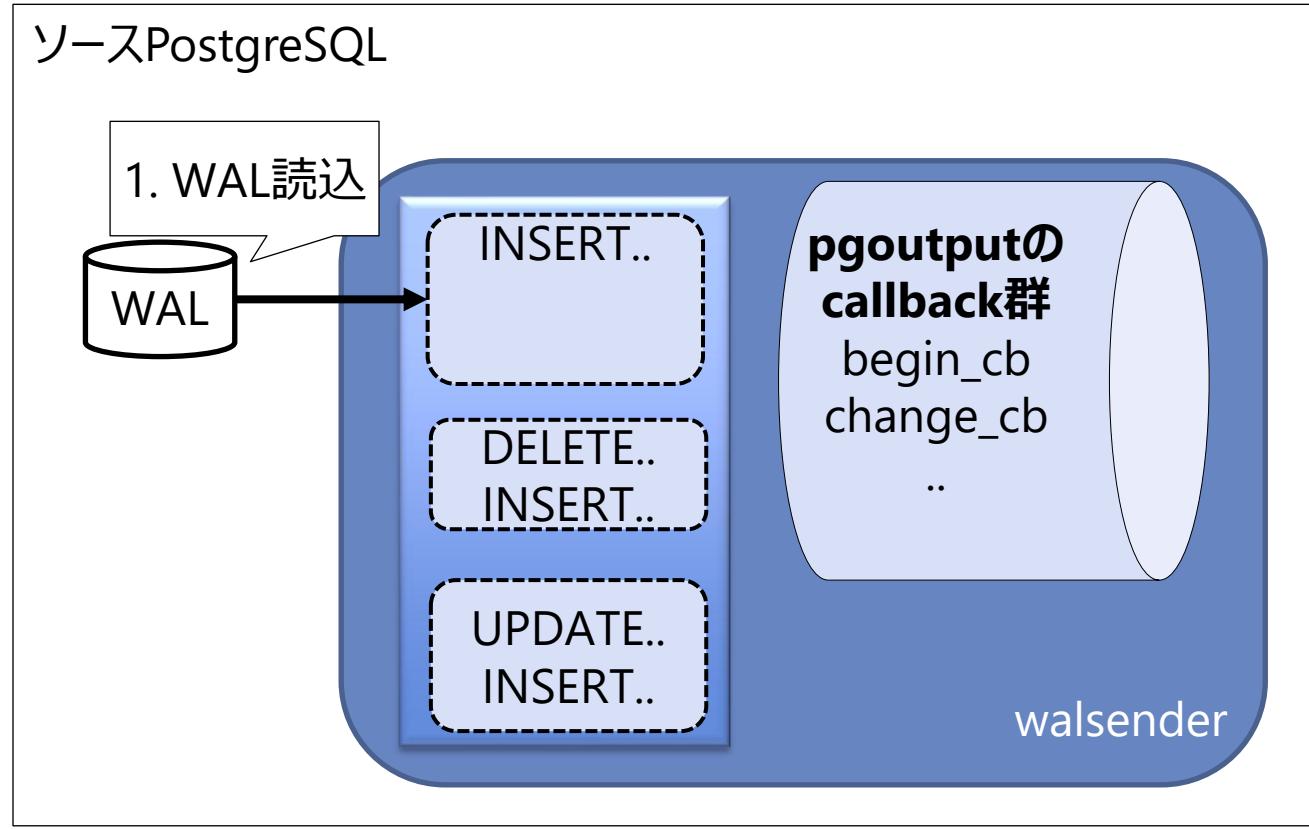
論理デコードの仕組み

仕組み



ロジカルデコーディングを実施。pgoutputを利用してるので、PostgreSQL本体の論理レプリケーションと同じ処理となる。以下既存トランザクションに1件UPDATE・COMMIT実施した例:

ソースPostgreSQL



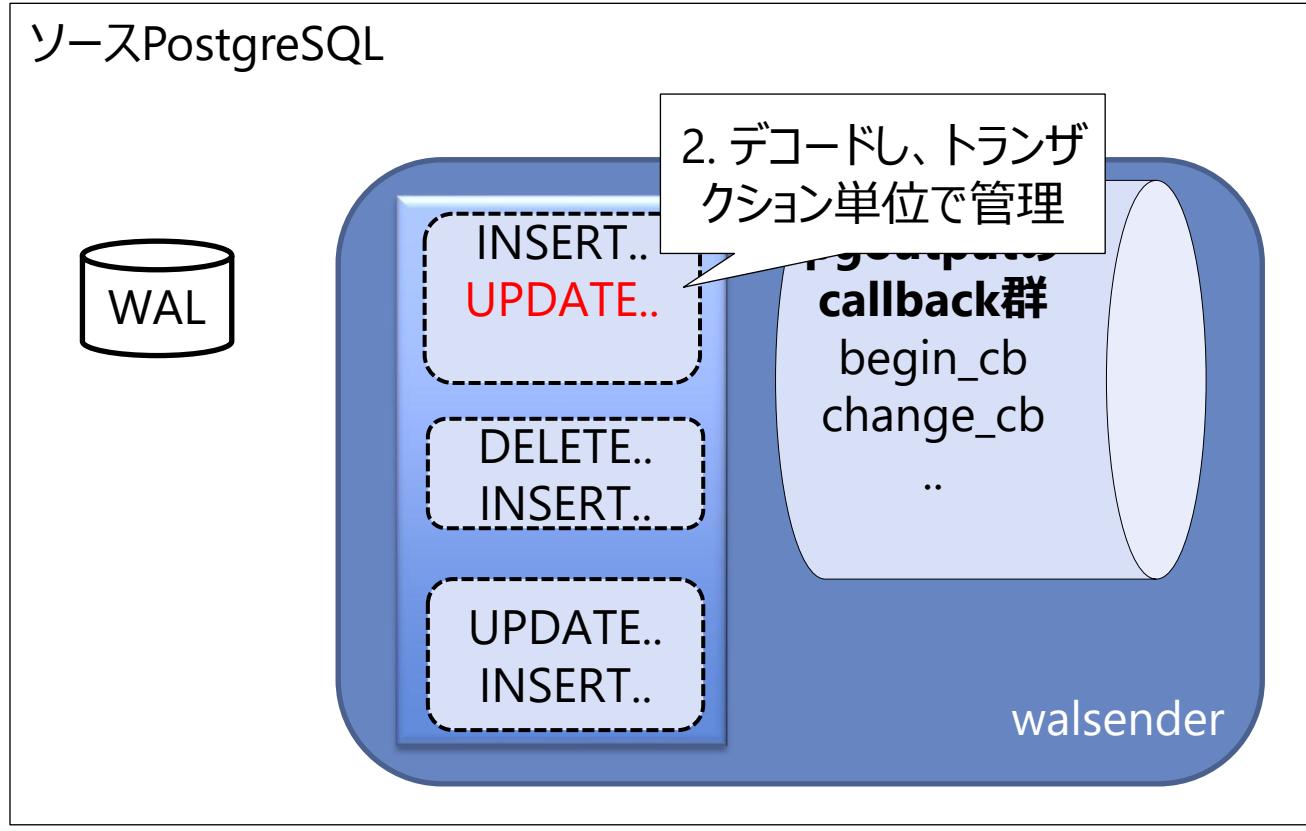
ReorderBuffer。
更新内容をトランザクションごとに管理



outputプラグイン。ここでは
pgoutput

ロジカルデコーディングを実施。pgoutputを利用してるので、PostgreSQL本体の論理レプリケーションと同じ処理となる。以下既存トランザクションに1件UPDATE・COMMIT実施した例:

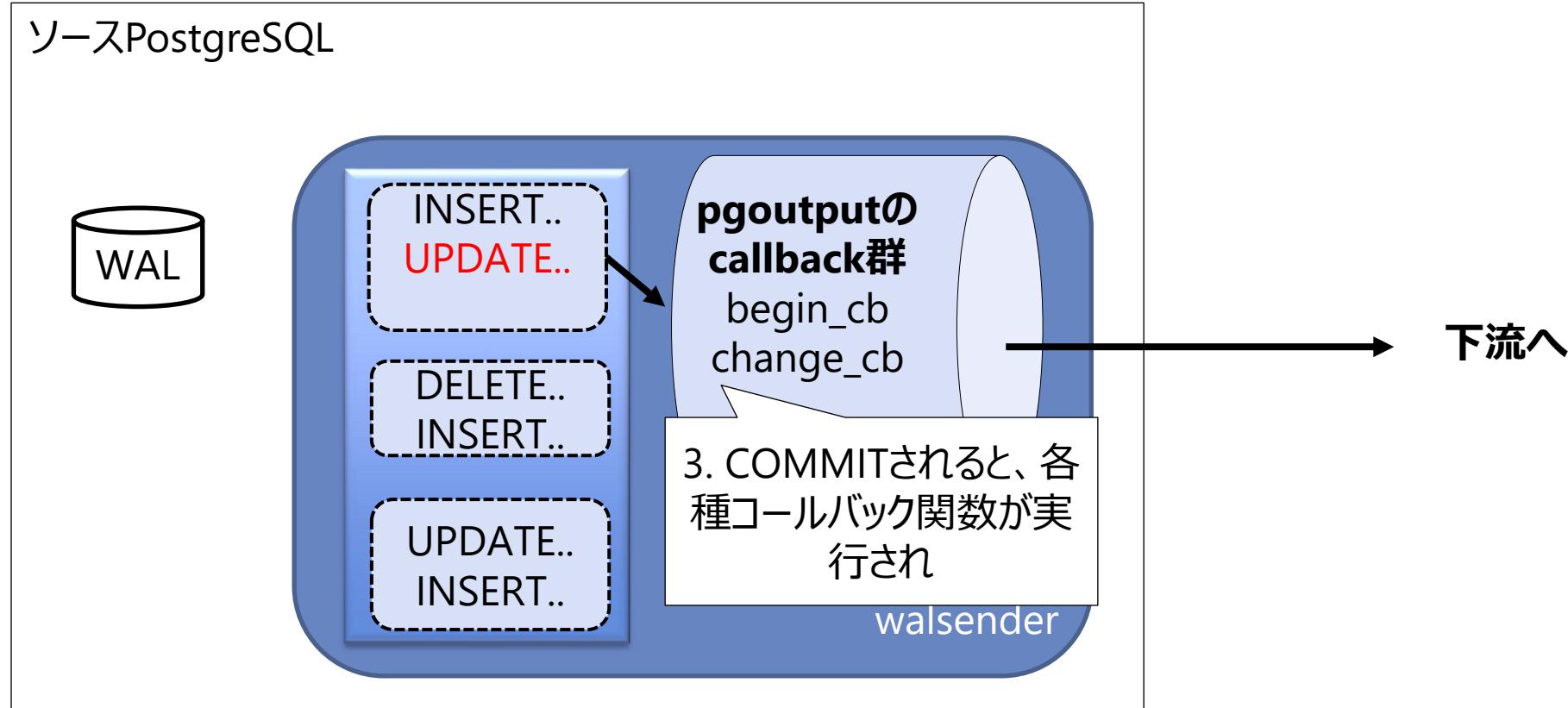
ソースPostgreSQL



PostgreSQLでのデータ処理

ロジカルデコーディングを実施。pgoutputを利用してるので、PostgreSQL本体の論理レプリケーションと同じ処理となる。以下既存トランザクションに1件UPDATE・COMMIT実施した例:

ソースPostgreSQL



・ストリーミングプロトコル

- レプリケーション接続専用のコマンドで制御する
(通常の SQL 接続では使えない)

CREATE_REPLICATION_SLOT

→ 指定したプラグイン用の論理レプリケーションスロットを作る

DROP_REPLICATION_SLOT

→ スロットを削除 (WAL 保持を解放)

START_REPLICATION SLOT ... LOGICAL

→ スロットから変更をストリーミング配信する

- pg_recvlogical

- これらのコマンドを内部で呼び出すラッパツール
- コマンドラインから論理デコードを試すときに便利

```
$ pg_recvlogical -d postgres --slot=test --create-slot
$ pg_recvlogical -d postgres --slot=test --start -f -
Control+Z
$ psql -d postgres -c "INSERT INTO data(data) VALUES('4');"
$ fg
BEGIN 693
table public.data: INSERT: id[integer]:4 data[text]:'4'
COMMIT 693
Control+C
$ pg_recvlogical -d postgres --slot=test --drop-slot
```

- **SQL インターフェイス**

- SQL コマンド経由で変更データを取得できる
- 通常の SQL 接続で実行可能（レプリケーション接続不要）
- シンプルな検証・学習用途に便利

関数	役割
pg_create_logical_replication_slot()	スロット作成
pg_logical_slot_get_changes()	変更データを取得（消費して前に進む）
pg_logical_slot_peek_changes()	変更データを取得（スロット位置は進めない）
pg_drop_replication_slot()	スロット削除

レプリケーション管理関数：<https://www.postgresql.jp/docs/17/functions-admin.html#FUNCTIONS-REPLICATION>

- WALレベルを **logical** に設定（変更内容を取得可能にするため）
- 論理レプリケーションスロットを作成できる状態
→ `max_replication_slots` と `max_wal_senders` の設定が必要
- 出力プラグインの選択 (`pgoutput` / `test_decoding` / 他)
- 主キーまたは一意キーの存在（更新/削除の識別に必須）
- `pg_hba.conf` で `replication` ロールのアクセスを許可

出力プラグイン

出力プラグイン : test_decoding

- PostgreSQL の 標準バンドル (contrib) に含まれており、デフォルトで同梱されている
- デコードされた変更イベントをテキスト形式で確認できる
- 本番で利用しない。検証・デバッグ用。

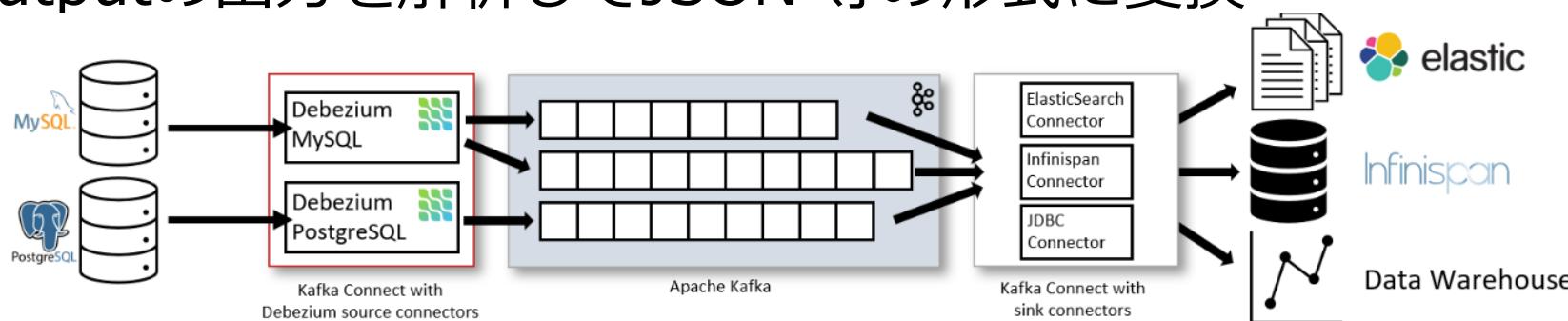
```
postgres=# SELECT * FROM pg_logical_slot_get_changes('test_slot', NULL, NULL, 'include-xids', '0');
location | xid |          data
-----+----+
0/16D30F8 | 691 | BEGIN
0/16D32A0 | 691 | table public.data: INSERT: id[int4]:2 data[text]:'arg'
0/16D32A0 | 691 | table public.data: INSERT: id[int4]:3 data[text]:'demo'
0/16D32A0 | 691 | COMMIT
0/16D32D8 | 692 | BEGIN
0/16D3398 | 692 | table public.data: DELETE: id[int4]:2
0/16D3398 | 692 | table public.data: DELETE: id[int4]:3
0/16D3398 | 692 | COMMIT
(8 rows)
```

出力プラグイン： pgoutput

- PostgreSQLの標準的な論理デコーディング出力プラグイン
- PostgreSQL 10以降で導入され、PostgreSQLのネイティブな論理レプリケーション機能の基盤として使用されている

代表的な利用例

- PostgreSQL → PostgreSQL
(論理レプリケーション / サブスクリiberへ apply)
- 一部CDCツールでも利用(例 Debezium)
→ pgoutputの出力を解析してJSON 等の形式に変換



<https://debezium.io/documentation/reference/stable/architecture.html>

- wal2json

<https://github.com/eulerto/wal2json>

→ JSON形式で出力するプラグイン。アプリケーション側で直接JSONを扱えるため扱いやすく、自作アプリなどで利用されている。

```
{
  "change": [
    {
      "kind": "insert",
      "schema": "public",
      "table": "table1_with_pk",
      "columnnames": ["a", "b", "c"],
      "columntypes": ["integer", "character varying(30)", "timestamp without time zone"],
      "columnvalues": [1, "Backup and Restore", "2018-03-27 11:58:28.988414"]
    },
    {
      "kind": "insert",
      "schema": "public",
      "table": "table1_with_pk",
      "columnnames": ["a", "b", "c"],
      "columntypes": ["integer", "character varying(30)", "timestamp without time zone"],
      "columnvalues": [2, "Tuning", "2018-03-27 11:58:28.988414"]
    },
    {
      "kind": "insert",
      "schema": "public",
      "table": "table1_with_pk",
      "columnnames": ["a", "b", "c"],
      "columntypes": ["integer", "character varying(30)", "timestamp without time zone"],
      "columnvalues": [3, "Replication", "2018-03-27 11:58:28.988414"]
    },
    {
      "kind": "message",
      "transactional": true,
      "prefix": "wal2json",
      "content": "this message will be delivered"
    }
  ]
}
```

出力プラグインを比較する

	test_decoding	pgoutput
利用目的	学習・検証・デバッグ用	実運用向け / 論理レプリケーションの基盤として利用
出力形式	人間が読めるテキスト形式	構造化された内部形式
想定利用シーン	ローカルで動作確認・動作理解	PostgreSQL → PostgreSQL、CDCツールなど
主な利用例	内部管理関数を使って変更データを確認	サブスクライバーへ配信 / 外部ツールへ橋渡し
導入難易度	contrib に同梱、すぐ利用可能	PostgreSQL ネイティブ（10以降）

簡単な実践

① スロット作成（前提条件は設定済）

```
postgres=# SELECT * FROM pg_create_logical_replication_slot('regression_slot', 'test_decoding', false, true);
```

slot_name		lsn
-----------	--	-----

-----+-----

regression_slot 0/16B1970

(1 row)

```
postgres=# SELECT slot_name, plugin, slot_type, database, active, restart_lsn, confirmed_flush_lsn  
FROM pg_replication_slots;
```

slot_name		plugin		slot_type		database		active		restart_lsn		confirmed_flush_lsn
-----------	--	--------	--	-----------	--	----------	--	--------	--	-------------	--	---------------------

-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----

regression_slot test_decoding logical postgres f 0/16A4408 0/16A4440
--

(1 row)

② 変更状況を見る（まだ変更がない）

```
postgres=# SELECT * FROM pg_logical_slot_get_changes('regression_slot', NULL, NULL);
lsn | xid | data
-----+-----+
(0 rows)
```

③ テーブル作成

```
postgres=# CREATE TABLE data(id serial primary key, data text);
CREATE TABLE
```

④ DDLはレプリケーションされないので、見えるのはトランザクションだけ

```
postgres=# SELECT * FROM pg_logical_slot_get_changes('regression_slot', NULL, NULL);
lsn | xid | data
-----+-----+
0/BA2DA58 | 10297 | BEGIN 10297
0/BA5A5A0 | 10297 | COMMIT 10297
(2 rows)
```

- ⑤ 変更が読み込まれると、それらは消費され、次の呼び出して送出されない

```
postgres=# SELECT * FROM pg_logical_slot_get_changes('regression_slot', NULL, NULL);
lsn | xid | data
----+----+-----
(0 rows)
```

- ⑥ 実際のデータを入れる

```
postgres=# BEGIN;
postgres=# INSERT INTO data(data) VALUES('1');
postgres=# INSERT INTO data(data) VALUES('2');
postgres=# COMMIT;
```

⑦ 変更を見る

```
postgres=# SELECT * FROM pg_logical_slot_get_changes('regression_slot', NULL, NULL);
lsn  | xid  |          data
-----+-----+
0/BA5A688 | 10298 | BEGIN 10298
0/BA5A6F0 | 10298 | table public.data: INSERT: id[integer]:1 data[text]:'1'
0/BA5A7F8 | 10298 | table public.data: INSERT: id[integer]:2 data[text]:'2'
0/BA5A8A8 | 10298 | COMMIT 10298
(4 rows)
```

- ⑧ 出力プラグインにオプションを渡すことで、フォーマットに影響を与えることができる

```
postgres=# SELECT * FROM pg_logical_slot_peek_changes('regression_slot', NULL, NULL, 'include-timestamp',  
'on');
```

lsn	xid	data
0/BA5A8E0	10299	BEGIN 10299
0/BA5A8E0	10299	table public.data: INSERT: id[integer]:3 data[text]:'3'
0/BA5A990	10299	COMMIT 10299 (at 2017-05-10 12:07:21.272494-04)
(3 rows)		

- ⑨ スロットを削除する

```
postgres=# SELECT pg_drop_replication_slot('regression_slot');
```

```
pg_drop_replication_slot
```

```
-----  
(1 row)
```

関数名	動作	WALの位置の扱い
<code>pg_logical_slot_get_changes()</code>	変更データを取得し、読み進める	読み取った位置まで消費される
<code>pg_logical_slot_peek_changes()</code>	変更データを取得するが、読み進めない	WAL の位置は維持されたまま

※

`peek` = 中身を確認するだけ

`get` = 中身を取り出して前進させる

誤って `get` してしまうと、その位置に戻せない（Slot 再作成が必要）

```
postgres=# INSERT INTO data(data) VALUES('3');
```

postgres=# -- 変更を消費せずに変更ストリームを先読みすることもできる

```
postgres=# SELECT * FROM pg_logical_slot_peek_changes('regression_slot', NULL, NULL);
```

lsn	xid	data
0/BA5A8E0	10299	BEGIN 10299
0/BA5A8E0	10299	table public.data: INSERT: id[integer]:3 data[text]:'3'
0/BA5A990	10299	COMMIT 10299
(3 rows)		

postgres=# -- pg_logical_slot_peek_changes()の次の呼び出しでも同じ変更が返される

```
postgres=# SELECT * FROM pg_logical_slot_peek_changes('regression_slot', NULL, NULL);
```

lsn	xid	data
0/BA5A8E0	10299	BEGIN 10299
0/BA5A8E0	10299	table public.data: INSERT: id[integer]:3 data[text]:'3'
0/BA5A990	10299	COMMIT 10299
(3 rows)		

- 未使用のレプリケーションスロットは必ず削除
→ 放置すると WAL が蓄積し、ストレージ枯渇の危険
- スロットが“読み手なし”になるとログが消費されない
→ サブスクライバーの停止・設定ミスに注意
- pg_replication_slots** で状態を監視（V14以降）
→ active / restart_lsn などを確認

```
-- SELECT * FROM pg_replication_slots;
-[ RECORD 1 ]-----
slot_name      | sub1
plugin        | pgoutput
slot_type     | logical
datoid        | 5
database       | postgres
temporary      | f
active         | t
active_pid    | 4477
xmin          | [NULL]
catalog_xmin  | 849
restart_lsn   | 0/4816C1E8
confirmed_flush_lsn | 0/4816C220
wal_status    | reserved
safe_wal_size | [NULL]
two_phase     | f
```

① DDL (CREATE / ALTER TABLE など) は対象外

対策 :

→ DDLのレプリケーションには別仕組みが必要

② PostgreSQLの **REPLICA IDENTITY** は、論理デコードで「どの列をキーとして行を識別するか」を決める

→ REPLICA IDENTITYがDEFAULTのまま、かつ主キーや一意キーがないテーブルでは、UPDATE／DELETE 時にbefore値（旧値）を取得できないため、UPDATE・DELETEがエラーとなる

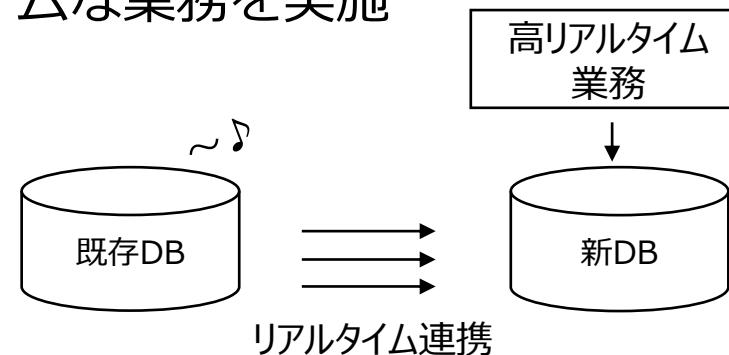
対策 :

→ 主キーまたは一意キーを設定する

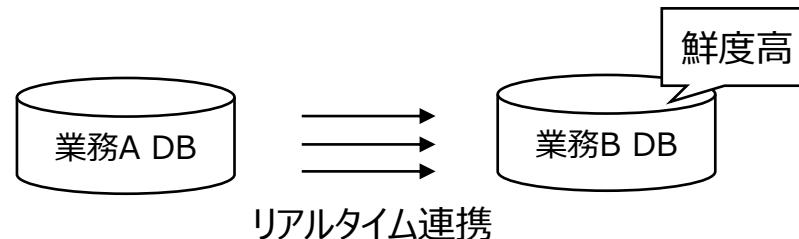
→ REPLICA IDENTITYにFULLを指定して全列を出力。（※性能への影響が大きくなる可能性あり）

応用の方向性

- CDC (Change Data Capture)
→ 論理デコードの抽出結果をリアルタイム活用する仕組み
- データを新DBへ同期し、新DBにてリアルタイムな業務を実施



- 日次バッチ処理をCDCに置換、高鮮度のデータで業務を実施



- ・「論理デコードがどのように動くか」
- ・「どの設定をすれば有効になるか」
- ・「簡単な実践テストを行えるようになる」

まとめ

- PostgreSQL の WAL にはすべての変更が記録されている
 - 論理デコードは WAL から意味のある変更を抽出する仕組み (INSERT / UPDATE / DELETE を細かい単位で取得できる)
 - 変更内容は出力プラグインを通して外部へ連携可能
 - 学習・検証用 : test_decoding
 - 実運用・CDC / 論理レプリケーション : pgoutput など
 - PostgreSQL を “他システムとつながるデータベース” に進化させる重要な機能
- まず test_decoding で小さく試してみるのがおすすめ

- PostgreSQL Documentation

<https://www.postgresql.org/docs/devel/logicaldecoding.html>

- 速習！論理レプリケーション@PostgreSQL Conference Japan 2022

<https://www.slideshare.net/slideshow/postgresql-logical-replication-postgresql-conference-japan-2022-nttdata/254219341>

ご清聴ありがとうございました。



SRA OSS

製品・サービスに関するお問い合わせ:  sales@sraoss.co.jp  03-5979-2701

- RECRUIT -

【 PostgreSQL キスパート】
【 インフラ系 OSS ミドルウェアエンジニア 】

OSS のように、オープンで情熱的であれ。

全世界のエンジニア・OSSコミュニティの揺るぎない信念とたゆまぬ努力に敬意を。
私たちも情熱を持ち、会社の枠を超えてオープンであり続けます。

Our Value

- OSS貢献
- カスタマーファースト
- マルチジョブ/マルチキャリア



株式会社SRA OSS 人事担当
✉ personnel@sraoss.co.jp

業務内容、待遇、カジュアル面談などお気軽にお問合せください。

2025 © SRA OSS K.K.